

問 題

別紙の文章は、ユダヤ系米国人の政治哲学者ハンナ・アレント（1906～75）による論考の一部である。

アレントはドイツに生まれ、第二次世界大戦中にナチス支配下の故国を脱出して米国に亡命した。自らが生きた20世紀に勃発した様々な政治的危機を、道徳性の崩壊という視点から認識し、ナチス・ドイツで犯された巨悪とその国家組織内の‘歯車’に過ぎないと自己規定するアドルフ・アイヒマンの個人的責任とを考究した『イェルサレムのアイヒマン：悪の陳腐さについての報告』に代表されるように、その生涯を通じて、道徳と責任、哲学と政治、思考と行動などの関係について、時に激しい批判を巻き起こしながら省察を重ねた。

別紙の論考は、ハンナ・アレント著、ジェローム・コーン編、中山元訳『責任と判断』（筑摩書房 2007年）に所収されたもので、アレントが1965年に米国の大学で行った道徳論に関する講義の一部である。その講義では、ナチス・ドイツの大罪と戦後のその全面的断罪とを、道徳論の観点からいかに理解し得るかということが中心的テーマであった。

以上の説明を踏まえて、次のAからDまでの問について、解答用紙の対応するAからDまでの各欄に、それぞれ350字以上500字以内で解答しなさい。

- A 下線部(1)に関し、‘自分の責任を他人になすりつける’事態（事件・事象）として、平成元年以降今日までの日本において、どのようなものが考えられるか。一つ具体例を挙げて説明しなさい。
- B 上記Aで解答した具体例をまず簡潔に示したうえで、その例において他人に自らの責任をなすりつけることはできないと主張する議論を展開しなさい。
- C 下線部(2)に関し、ある人間が自らを‘抽象的で特定できない’存在として提示することによって自分自身の責任を免れようとする状況として、第二次世界大戦終結以降今日までの日本において、どのようなものが考えられるか。一つ具体例を挙げて説明しなさい。
- D 上記Cで解答した具体例をまず簡潔に示したうえで、その例においてその人間の責任を問う議論を展開しなさい。

【解答作成上の留意点】

- 1 本問は、解答者の思想や信条を問おうとするものではない。また、法知識や法的分析を求めるものでもない。
- 2 AからDまでの4つの解答は、それぞれ独立のものとみなし、独立に採点する。他の解答欄で記述したことでも、必要な場合には繰り返して記述しなさい。

別紙

著作権法により公開していません

(「道徳哲学のいくつかの問題・第一講」より抜粋)

(注) 男の幼児が無意識のうちに母親に愛着を持ち、自分と同性である父に敵意を抱くことで発生する複雑な感情。父と知らずに父を殺害し、生母と結婚したギリシャ神話のオイディプスにちなんでフロイトが提唱した用語。

(新村出編 『広辞苑 第六版』岩波書店 2008年)